

# 「石畳むら並み博物館」で 人生の交流を

## 「石畳を思う会」結成

内子町石畳地域は、木蝨と白壁の町・内子町の中心部から車で約20分。急峻な地形に棚田や果樹畑、さらに自家用野菜を育てる畑があり、

「日本農村の原風景」を思わせる情緒豊かな景色の広がる、心がホッとなごむ「むら」であります。

人口約350人のこの小さな集落に、20年前一つの転機がやってきました。過疎化が進んで地域が衰退し「このままでは集落が消えてしまふ」という危機感のなかで、20代から40代の農家や町職員の有志12名が「石畳を思う会」を結成、石畳の地域づくり運動（村並み保存）をスタートさせたのです。



水車小屋の建築

多数決制をとらず、提案者がリーダーとなつて活動をするという独特の申し合わせのもと、話し合いや先進地研修、学習会を重ね、「思う会」の初仕事は「水車小屋」の復元でした。一人5万円ずつ出し合い、総費用60万円を

かけた手作りの水車小屋は、会員に大きな満足と自信をもたらし、その後の思う会活動の礎ともなりました。

現在は、毎年11月には参加住民150人が1500人の来場者を楽しませる「水車まつり」。自然にホタルが棲息できる環境づくりのための「ホタル観測活動」。地元の自然を深く理解し、生態系を守っていくための「自然観察会」。石畳小学校の生徒らと共に、蕎麦の種まきから収穫、その蕎麦粉を使つての「蕎麦打ち



石畳を思う会  
山岡 亨  
(内子町)

体験」など、多彩な活動を展開しています。

## 「石畳むら並み博物館」とは

そんな「石畳を思う会」の活動の中でも、「地元学」から生まれた、屋根のない博物館「石畳むら並み博物館」は、まさに「今現在変化しつつあるむら」を目の前で体験できる胸踊るスペースです。かつての生活文化、かつての生きる知恵だけでなく、「今ここに」生きる人たちの知恵、文化、人生、思いなどを参加してい



石畳むら並み博物館での藁細工体験



弓削神社の屋根付橋

いただいた方と共に分かち合える空間となつていきます。

11月の愛媛大会では、「石畳むら並み博物館」をメインに、我々石畳の人間と参加していただいた方の、心の交流、情報交換、さらには人生の交流まで踏み込めたらと考えております。

### 分科会参加者の活動発表を

その一策としてしまして、夕食交流会の前に、参加していただいた方々の日頃の活動発表の時間も予定させていただいてお

ります。忌憚なく胸襟を開き、腹を割って交流するための前段階として、双方向の学びとして情報交換を実現できたらと考えてます。



農家の庭先レストラン

二日目には実際に石畳を歩いていただき、ご自分の手足、五感、全てを使って、石畳を満喫していただくメニューを検討中です(例えば農家の軒先で伝統食を食べていただく軒先レストラン食べ歩きなど)。もちろん石畳で採れた蕎麦粉を使っての「手打ち蕎麦」をご賞味いただきます。

### なぜ「むら並み博物館」なのか？

20年前に「石畳を思う会」が結成されてから、その動機となった「集落の消滅の危機感」は今なお消えず、さらにその足音を早めている感すらあります。だからこそ今できることは何か？タダ単に、人を集め、時間を早め、農村を街に変えようと努力するのではなく、「農村・石畳」としての「個性」を確認し、「誇り」を呼び覚ます。そんな活動の一環として



軒先の生活風景、これも石畳の財産

「石畳むら並み博物館」はあります。自然も人も循環する運命にあるなら、人の流れもモノの流れも、必ず一極集中から、地方分散へと流れを変えてきます。(かく言う私も都会から石畳に移住してきた人間です。)

そんな現在だからこそ、自分たちの住む集落の「個性の確認」と「誇りの喚起」は必要なのだと思います。

石畳の自然と人間をじっくりと味わい、さらには人生の交流へと深く踏み込んでいただける方のご参加を心からお持ちしております。